

時間と生をめぐる

——ハイデガーとフッサール——

宮原 勇 (名古屋大学)

思索していると、あたかもヘラクレイトスが
そばに立っているようなときが何度もある!

——ハイデガー

0. はじめに ——ハイデガーは何を問い続けたのか——

晩年になっても「現象学」という立場を結局は捨てずに、しかも存在の問いを問い続けたハイデガーは、そもそもその存在という概念でもってなにを探求しようとしたのだろうか。存在と時間との間の根源的関係を解明しようとしたとするならば、どのような洞察にたどり着いたのだろうか。

存在の意味への問いということで、様々な理解される存在の意味を統一的に理解することが目指されていたとしよう。存在の意味を統一的に理解することとは、いったいどのようなことなのか。まずは、若きハイデガーが影響を受けた²というブレンターノの著作を見よう。

ブレンターノは、その著作 *Von der mannigfachen Bedeutung des Seienden nach Aristoteles* (1862) では、カテゴリーによって分類された $\delta\upsilon\nu$ の系統図を描いている。それによれば、まず最初に $\alpha\upsilon\tau\acute{\omicron}\nu\sigma\iota\alpha$ と $\sigma\upsilon\mu\beta\epsilon\theta\eta\kappa\acute{\omicron}\varsigma$ とが分けられている。それからの下位区分は後者の再分類化がなされるだけであって、 $\alpha\upsilon\tau\acute{\omicron}\nu\sigma\iota\alpha$ それ自体がさらに分類されるということはない。そして、十あるカテゴリーの順番は形而上学的に意味のあるものとして順序を付けられている³。そして、その第一のカテゴリーを $\alpha\upsilon\tau\acute{\omicron}\nu\sigma\iota\alpha$ とする。 $\alpha\upsilon\tau\acute{\omicron}\nu\sigma\iota\alpha$ と残りの他のカテゴリーとの関係は、第一のカテゴリーが存在者 (Seinendes) そのものであるのに対して、他の残りのカテゴリーは、その第一のカテゴリーについて語られるカテゴリーであるという点にあり、それらはある種のアナロジーで $\delta\upsilon\nu$ と言われるにすぎないものであるという。

¹ Walter Schulz に語った言葉。Werner Beierwaltes, *Heideggers Rückgang zu den Griechen*, Verlag der Bayerischen Akademie der Wissenschaften, München, 1995, S.5. Beierwaltes によれば、『存在と時間』以降のハイデガーにとって、思索の導きとなったのは、Vorsokratiker たちであったという。特にヘラクレイトスであったという。「彼らたちのみが、根源的で、原初的で、従って、本質的な問いと思索とを呈示してくれる」(S.6) からである。ハイデガーは、「ギリシア的なものをよりギリシア的に思索すること」を目指したという。

² Vgl. Martin Heidegger, *Mein Weg in die Phänomenologie* (1963), in: *Zur Sache des Denkens*, Max Niemeyer Verlag, Tübingen, 1969, S.81.

³ 10 個のカテゴリーの配列順は、 $\alpha\upsilon\tau\acute{\omicron}\nu\sigma\iota\alpha$, $\pi\omicron\iota\acute{\omicron}\nu$, $\pi\omicron\sigma\acute{\omicron}\nu$, $\pi\omicron\iota\epsilon\acute{\iota}\nu$, $\pi\acute{\alpha}\sigma\chi\epsilon\iota\nu$, $\epsilon\chi\epsilon\acute{\iota}\nu$ $\kappa\epsilon\acute{\iota}\theta\alpha\iota$, $\pi\omicron\upsilon$, $\pi\omicron\tau\acute{\epsilon}$, $\pi\rho\acute{\omicron}\varsigma$ $\tau\iota$ である。カテゴリーによって分類された $\delta\upsilon\nu$ の系統図は、下記にある。Franz Brentano, *Von der mannigfachen Bedeutung des Seienden nach Aristoteles* (1862), Georg Olms Verlag, Hildesheim, 1984, S.177.

したがって、すぐれた意味で存在すると言われるものは実体 (Substanz) であり、単なる何かではない。そうではなくて、端的に存在するものである。[中略] 実体こそ、存在するもののすべてのなかで、あらゆる仕方、第一のものである。概念に関して、認識に関して、時間に関して、第一のものである。

そして、

いまや形而上学が、存在者そのものについての学であるならば、その中心的研究対象は、実体であろう⁴。

ここで言う実体 (Substanz) とは、もちろん οὐσία であるが、それはまさに ὄν の最たるものである。いったいこの οὐσία とはどのようなものなのか。その探求が必要というのである。

この οὐσία をハイデガーは『形而上学入門』では、An-wesen と訳し、次のような二つの事態を区別する。

「存在」はギリシア人にとって二重の意味で存続性 (Ständigkeit) を言い表している。

1. 発 - 生しつつあることとしての自己の - 中に - 立つこと (das In-sich-stehen als Ent-stehend)。(自然 φύσις)
2. だが、そのようなものとして「存続的」であり、つまり、とどまりつつ、滞在することなのである。(ウーシア οὐσία)⁵

このように φύσις としても οὐσία としても、ギリシア人たちにおいては、何らかの「存続性」、つまり恒常的に目の前に横たわっているものが理解されているという。そのように恒常的、あるいは「存続的」現前 (Anwesen) > として「存在」を理解する端緒からは、「基体」(ὑποκείμενον) としての subiectum からくわたしの表象作用の中でのみ、そしてわたしの表象作用を通じてわたしに向かって投げられたもの > という意味での、「表象の立場」からの obiectum へ転化する歴史が続く。ハイデガーが追い求めたものは、そのような道筋ではない。そのように、実体へと繋がる<恒常的、あるいは「存続的」現前>ではなく、自ら発生し、生成するような、生き生きとした立ち現れとしての現前なる事態である。

もう一度、『存在と時間』において、οὐσία に触れられている箇所を確認したい。

存在者の存在についての古代の解釈は、「世界」あるいは広い意味での「自然」に定位しており、実際、存在の理解を「時間」から獲得してきたのである。[中略] 古代の存在論においては、存在の

⁴ Ebd., S.219f.

⁵ Martin Heidegger, *Einführung in die Metaphysik*, Max Niemeyer Verlag, Tübingen, 1976, S.48.

⁶ Vgl. Martin Heidegger, *Zolliker Seminare*, herausgegeben von Medard Boss, Vittorio Klostermann, 2006, S.152f.

意味が「臨前」(παρουσία)、ないしは「現前」(ουσία)として、つまり存在論的、<とき>的には「現前性」(Anwesenheit)を意味するものによって規定されているという事情である。[中略]ということ、とりもなおさず、それはある特定の時間様態である「現在」(Gegenwart)を考慮して理解されているということなのである⁷。

ここでの Anwesenheit とは、temporal な規定として語られており、不変な形で恒常的に現前している、いわば「脱時間的」な有り様を指し示しているのではない。「臨前」(παρουσία)とは、Adventus であるから、そこにずっと現前しているという意味ではない。「到着すること」、「現前するようになること」である。時間的変化がそこには込められている。Anwesen は ständiges Anwesen という意味で、materia としての物質か、あるいはその逆の forma としてのアイデアへと繋がる筋道か、あるいはさらに Anwesenung という動的な事態を意味する道筋が絡んでいる⁸。

われわれは、ハイデガーが生涯を懸けて目指した道、つまりあくまでも「時間」という視点から「存在」を問う姿勢を追究してみたい⁹。それは、まさに時間的な出来事として<存在者が存在するようになる、現れる、出現する>といった事態の解明である。本論文では、そのような時間的プロセスを「現出」(Erscheinung)と呼ぶことにする。

もちろん、存在者が存在するようになるといった場合、その存在者とはわれわれ人間存在、言い換えると主体としての存在ではない。あくまでも、<対象>存在に対応するものである。「対象の対象性」としての存在は、ハイデガーにおいては、これから見るようにヘラクレイトスを論ずることを通じて、「立ち現れる」こととして捉え直された。われわれはそれを、前述の「現出」なる概念に、時間性を明示的に付加して、暫定的に「時間的現出」としておく。

そしてわれわれは、最終的には、このような φύσις としての「時間的現出」の根底には、<生ける自然>の経験が潜んでいることを明らかにしたい。

とはいえ、「対象の対象性」を、フッサールに倣って根本的に時間的動向が骨格を成す<現出>なる概念で言い換えたとしても、ハイデガーにおいては「意識」や「主観性」といった要素は、拒絶されている。現出や、立ち現れを語るにしても、<主観に対して現前する>とか、<意識に対して現出する>という与格 (dativus) の主観を伴った表現は見いだせない。現存在 (Dasein) の Daこそがそのような与格性を示しているのであろうか。ハイデガーは<主観 - 存在>自体を問うことの怠り (Versäumnis) を指摘するが、そういうハイデガー自身の思索では Anwesen や φύσις の根源的意味が<立ち現れること>だとすると、それに立ち会う主観は一切考えられないのだろうか。

そこでまずわれわれは、対象の成立の時間的プロセスを綿密に分析したフッサールの初期

⁷ Martin Heidegger, *Sein und Zeit*, Max Niemeyer, Tübingen, 1927, S.25.

⁸ 詳しくは、拙論「序論 ハイデガーの根本的視座」、特に第2節を参照のこと。宮原勇編『ハイデガー「存在と時間」を学ぶ人のために』世界思想社(2012)、6-20頁。

⁹ ハイデガーは1962年の講演では下記のように言っている。「存在は西洋、ヨーロッパの思索の初期以来、今日まで、Anwesenと同じことを言っている。Anwesen、つまり Anwesenheit ということから Gegenwartが見えてくる。この Gegenwart は、通常考えでは、Vergangenheit と Zukunft とともに、時間の特徴を形成しているという。存在は、Anwesenheit として時間によって規定される」(Martin Heidegger, *Zeit und Sein* (1963), in: *Zur Sache des Denkens*, Max Niemeyer Verlag, Tübingen, 1969, S.2)。

時間論を検討することとする。フッサールは、当初は時間的に移り変わる対象がいかなるプロセスにおいて成立するかを解明しようとしたのであるが、時間的对象以外の対象も根本において認識作用による構成のプロセスにおいて成立してきたものであるとするならば、そもそもが非時間的对象といったものは存在しないのであり、あらゆる対象に関する一般的理論という意味を持つに至った。全ての対象を「時間の相の下に」見ようとしたこの時間論講義において皮肉なことに「時間的对象を根源的に構成するという時間的構成意識」自体は、時間の中には無いものであるという。つまり根源的時間意識自体の「非時間性」というテーゼが立てられた。このようにして問題化した、衝撃的テーマ、つまり「根源的に構成する絶対的時間意識」の「無時間性」という問題では、まさに時間的現出に立ち会う認識主観そのものの「非時間的」あり方が問われるようになったのである。

1. フッサール初期時間論のアポリア

1.1 フッサール認識論の基本概念

まずわれわれは、Husserliana, Bd.X¹⁰の時間論がいかなる認識論的枠組みの中で論じられているかを明示しておかねばならない。そして、その内的時間意識の分析を通じて、そのような認識論的枠組み、言い換えれば認識論的スキームが崩壊し始めるのである。下記の基本概念は、『論理学研究』初版の1900/01年以降、そして『純粹現象学および現象学的哲学の諸構想 (イデーエン)』第一巻1913年に至るまでの時期の認識論上のスキームである。下記の基本概念は、擬似的に公理系の形式で呈示することにする。場合によっては自明な項目もあるが、そのような項目を掲げるのも、いかなる前提が潜んでいるかを明らかにするためである。

- I. 人間の認識活動を志向性、ないしは志向作用という。
- II. 志向作用には、それぞれ対象が対応するとともに、そのような志向作用によって意識内に生じた表象、あるいは意識内容が対応している。つまり、作用 - 内容 - 対象という三項関係が想定されている。
- III. 志向性には、「現在化」(Gegenwärtigung) と「現前化」(Vergegenwärtigung) の区別がある。現

¹⁰ フッサールは、『論理学研究』(1900/1901)において、われわれの認識活動を「客観と主観との相関関係」という視点で考察する方法を提唱し、認識においてわれわれの意識の内部に形成される認識内容がどのような認知プロセスによって生成するかを解明しようとした。彼はそのような新たな方法を駆使して、1904年から1905年にかけて、知覚、想像、時間、空間といった事柄に関する分析を行った。その時期の講義録や草稿のほとんどは、没後刊行されはじめた全集 Husserliana のそれぞれの巻として公刊されている。しかし、その中の時間論に関しては、生前すでに弟子の Edith Stein と Martin Heidegger によって編集され、*Jahrbuch für Philosophie und phänomenologische Forschung*, Bd.IX, 1928 において刊行されていた。しかし、このテキストはどのような草稿からどのような方針で構成されたのか明確ではなく、テキスト内部の整合性や図表の表記の仕方などに問題があった。戦後、1966年に Husserliana, Bd.X として Rudolf Boehm の編纂にて、1893年から1917年までに書かれた時間に関する包括的なテキスト群が刊行され、この時期の時間論の全貌が垣間見られるようになった。

在化という志向作用のグループには、知覚が含まれ、現前化のグループには、記憶（長期記憶としての想起）や想像が含まれる。

IV. 記憶には第一次記憶（短期記憶）と第二次記憶（長期記憶）がある。前者は「過去把持」（Retention）¹¹といい、後者は「想起」（Wiedererinnerung）という。

V. 外界の様々な事象やわれわれの意識の内部に生起する心の活動や感情などをみな「現象」（Phänomenon）という。それに対して、「現出」（Erscheinung）といった場合、<～が現出する>といった動詞表現を念頭に置いて使用され、その場合の対象は「現出するもの」（das Erscheinende）と表現され、「現出」（Erscheinung）自体は、そのようにして現出している「現象」そのものを指す。

VI. 時間的に変化する対象に関して、連続体（Kontinuum）とは、始まりと終わりをもつひとまとまりの対象をいい、それを形成する部分を位相（Phase）という。さらにそれぞれの連続体は、時間位置（Zeitstelle）、言い換えれば時点から成っている。時点は、幾何学的点とは異なり一定の可変的幅がある。連続体とその位相との関係は相対的であり、全体と部分の関係に当たる。

VII. 時間には三つの時制がある。即ち、過去、現在、未来である。

VIII. 過去に関して、過去把持と想起の区別があるように、未来に関しては、未来把持（Protention）と予期（Erwartung）の区別がある。

IX. 認識とは、意識の内部に対象に関する認識内容を「構成」（Konstitution）する働きである。そのようなプロセス自体を<対象を構成する>作用とも表現する。そのような構成のプロセスは、感覚が与えられる段階と、そのような感覚に<意味を付与する>（Sinnggebung）働きとから成っている。後者の段階の作用を「統握」（Auffassung）と呼ぶ。

以上の基本的な概念やテーゼを前提にし、フッサールの『時間講義』での下記の諸問題を整合的に説明できるか検討することとする。ここで「前提」という表現を使用したか、あくまでも暫定的前提であり、問題の解明が困難になった場合には、上記の基本図式の変更が必要になる可能性がある。

1.2 同時性の問題

現象学は根本的には、対象の認識を志向性にとらえ、その分析をするのだが、時間的対象の構成の分析に際して、それ自体が時間的に経過する現象である志向的作用の働きによって理解しようとするか、それ自体、大きな困難に直面する。時間的対象の構成の問題とそのような

¹¹ 「過去把持」という概念自体、この時間論講義において出現したのであり、この時間論講義が前提していたとはいえない。

構成を遂行する志向作用自体の時間性の構成という二つの問題を抱え込むことになるからである。

一般的に言って、対象を構成する志向作用とは常に現在時制において機能する。現に存在する対象（あるいは現在持続している時間対象）の構成に関しては、それを構成する志向作用は、対象の時制と合致し、同時性が確保される。具体的には、知覚といった現在化（Gegenwärtigung）によって、ちょうどその知覚作用が遂行されている時間帯に現に持続している時間対象が認識される。しかし、過去や未来といった時制の場合、そのような時間態にある時間対象を構成する志向作用は、〈現在〉時制において遂行される。そこで、必然的に志向作用と志向対象のそれぞれの時間性が合致しないことになる。基本的にはすべて現在時制において時間対象が構成される¹²。

そこで現象学的時間論にとって同時性にまつわる問題は二種類あることになる。つまり、(1) 知覚においては知覚作用と知覚対象との同時性が真の意味で主張できるかという問題と、(2) そのような同時性が成立しない記憶と予期に関して、現在において遂行される認識作用としての記憶と予期は、それぞれの対象の時制である過去と未来というそれぞれの時間性格をどのように「構成」するのか、という問題である。〈もはやない対象〉と〈まだない対象〉は、どのような意味で志向性の対象となりうるのか。

まず(1)の問題について。前述の基本概念の IX によれば、知覚はまずは感覚与件 (sense-data) の受容と、そのような感覚与件に対しての〈意味付与〉 (Sinnggebung) 作用とから成っているという。そうすると、知覚のプロセスは感覚の発生、言い換えると感覚器官における触発 (Affektion) の発生時ではまだ知覚作用が始まったといえない。狭義の知覚は、「魂を吹き込む」 (beseelen) と表現される意味付与作用が開始されて初めて知覚プロセスが開始されるはずである。あるいは、〈感覚与件の受容〉+〈能動的意味付与作用〉という両方の位相全体を知覚と呼ぶのであろうか。

複数のシラブルを有する単語が発音された場合、それは時間的に変化する対象の認識の例になるが、(i) 客観的時間を基準とした分析、(ii) 時間意識の内部での連関を考慮して分析し、しかも同時に超越的、つまり外在的对象自体の時間性を解明しようとする場合、(iii) 時間意識の内部での連関のみを考慮し、超越的对象を想定せず、内在的領域で認識内容の時間性を解明する場合の三つがあり、それぞれ同時性が成立するか否かで事情が異なる。

(i) の場合。外部のどこかから聞こえてくる声は、厳密には鼓膜に刺激を与えるまでは、広義の知覚はまだ開始されてはいず、感覚の発生自体、物理的音響の発生と完全に一致

¹² このような事態そのものは、すでに Augustinus が *Confessiones* Liber XI, Cap. XX にて指摘している〈三重の現前〉という事態である。つまり、時間的对象は、過去に関しては、記憶 (memoria) によって「過去 [の事物] の現前」 (praesens de praeteritis) が確保され、現在に関しては、知覚 (contuitus) によって「現在 [の事物] の現前」 (praesens de praesentibus) が認識され、未来に関しては、期待 (expectatio) によって「未来 [の事物] の現前」 (praesens de futuris) が認識されるのである。つまり、過去と未来に関しては、〈過ぎ去った事物がわれわれに現前してくるのはわれわれ自身が現在という時制において遂行する記憶を通じてである〉し、〈未来にある事物がわれわれに現前してくるのはわれわれ自身が現在という時制において遂行する予期を通じてである〉。ということは、対象の時間点とそれに対応する認識作用の時制とが一致する、つまり同時性が成立するのは、現在と知覚のみであり、他の時制に関しては一致しない。

するとはいえない。当然ながら物理的音響が開始し、持続し、消えるというそれぞれの時点は意識に現れた〈開始 - 持続 - 停止〉と完全に一致するわけではない。(ii)において超越的对象に関する触発によって生じた感覚印象が、ごくわずかの時間であっても過去把持によって一時的に保たれていない場合には、それに対する意味付与作用が働かないのであるから、知覚作用の内部に過去把持という時間に関する志向作用が入り込んでいる。(iii)の場合、知覚のプロセスを広義のものとして受け取るとすると、〈感覚与件の受容〉+〈能動的意味付与作用〉といった認知プロセスが成立して初めて内在的認知内容としての「対象」、ないしは「対象性」が成立するのである。ということは、この場合にだけ、知覚と知覚対象の同時性が認められる¹³。

さらには、今述べたことが、未来方向にもあてはまる。

まず外界からの触発により印象（フッサールでは原印象 *Urimpression*）が生じ、それが過去把持によって一時的に意識内にとどめ置かれ、それに対して意味付与作用によって意味づけがなされ、一つの対象に関する把握としての「知覚」が生ずる。このプロセスは、知覚の過去位相に関する構造であるが、未来方向での位相においては、未来把持（*Protention*）が何らかの機能を果たすのではないか、という予想が生ずる。例えば、*philosophy* という単語は *phi-lo-so-phy* というシラブルに分解できるが、*-lo-*の発音が聞こえた段階で *phi-*は過去把持によって意識にとどめ置かれているが、同時にその時点ですでにリアルタイムで意味付与がなされ、〈*philosophy*〉ではないかという予想（*Antizipation*）がなされると、次の時点での音声的刺激への未来把持が生ずるはずである。つまり、*-so-*への予想である。ということは、一定の時間間隔において持続する時間対象の知覚の場合、物理的音響が鳴り終わる以前にすでに一定の知覚が成立している可能性がある。もちろん、それはあくまでも予測であり、*philo-*から、*-logy* が続くかもしれない。その場合は、予測が破られ、変更がなされ、修正される。未来把持の方向性、あるいは具体的な経験の予想はどのようになされるか、どのような動機づけがなされるかが問題である。例えば、感覚の段階での連想（*Assoziation*）なのか、あるいは意味内容に関する統握（*Apprehension*）の働きによる予測なのか、いくつかの可能性はある。

これまでの議論ですでに密かに問題化していたのは、過去把持や未来把持という作用は、端的に「志向性」と言われうるのだろうか、という問いである。

フッサール自身も認めているように¹⁴、過去把持は、志向性であるがかなり奇妙な構造を持っている。過去把持は、知覚と同様に現在野（*Präsenzfeld*）の中に位置づけられるが、それ自体、措定的作用なのであるのか、措定的性格を有するのか問題である。未来把持に関しても同様の事情がある。

1.3 〈同時性の否定〉と非時間性

Husserliana, Bd.X の編纂者 Rudolf Boehm が、フッサールによって 1908 年から 1909 年にかけて書かれたとする草稿 (Nr. 50 草稿, Husserliana, Bd.X, S.324-334, これは Beilage V, 同 S.109ff.

¹³ Husserliana, Bd.X, S.109ff., Beilage V.

¹⁴ Husserliana, Bd.X, S.31ff., § 12.

に關係する)においてなされた立場の変更を検討する。つまり、それまで知覚(作用)の時間と知覚されたものとの時間が同一である、あるいは感覚(作用)の時間と感覚されたものの時間とは同一であるという<志向作用と志向対象/志向内容との同時性>というそれまでのテーゼが否定されたとされる見解に関して検討する。このような見解は、Leuvenの Husserl-Archiefにかかわる三人の研究者¹⁵による著作 *Edmund Husserl, Darstellung seines Denkens*, Felix Meiner, Hamburg, 1989, S.102 によって明確な形で定式化された。

まず、彼らの定式化を見てみよう。

フッサールは、それまで<感覚作用が働く時間と感覚された対象の時間とは一致している、つまり同時である>、<知覚作用の時間と知覚対象の時間とは同時である>と考えていた。それが、1908年10月から1909年の夏学期までの間に執筆された Nr.50 において、立場の変更をしたという。そのテキストでは、過去把持に伴う対象の側での変様と「時間を構成する流れ」をいかにして知覚するかを論じた後、次の文でもって締めくくられている。

時間流が客観的運動のようにみなされることに、不合理な点はあるのだろうか。——ある。他方、記憶[この場合、第一次記憶、つまり過去把持]もそれ自身、自らの今を有する何ものかである。そして、例えば[ある特定の]音と同じ今を有する。——違う。ここに根本的な誤りが潜んでいる。意識の諸様態の流れ(Fluß)は、ひとつのプロセスではない。その今-意識はそれ自体、今あるのではない。今-意識と<一緒に>存在する、過去把持の意識は、今あるのではない。それは、今と同時なのではない。同時と言ったところで、意味はない。従って、感覚は、それで意識が理解されたならば、(内在的に持続する赤や音などの、感覚されたことではない)、同様に、過去把持や想起や知覚などは、非時間的であり、内在的な時間の内にあるようなものではない¹⁶。

つまり、時間的対象を志向する意識作用からなる「時間を構成する意識」自体は、「非時間的」であるというのだ。なぜなのだろう。

もしかりに時間を構成する意識が時間の中にあるとすると、この意識を時間的なものとして構成するような、また別な意識が必要となるからである。この議論の根底には、つぎのような考えが潜んでいる。すなわち、<時間的なものとして与えられる全てのもの>(alles zeitlich Gegebene)、つまり「現出するもの」(das Erscheinende)や、さらにはそれらを認識する体験さえも時間的なものなのであるから、意識の中で構成される(konstituiert)と考えているのである。

従って、<究極的に構成する意識、つまり全ての構成に先立つ意識>¹⁷は、意識ではあるが、「時間的」なものではない意識なのである。つまり、この時期は<究極的に構成する時間意識>の非時間性が帰結した、重要な時期という¹⁸。

¹⁵ Rudolf Bernet: 1946-, Iso Kern: 1937-, Eduard Marbach: 1943-.

¹⁶ Husserliana, Bd.X, S.333f.

¹⁷ Ebd., S.73.

¹⁸ Vgl. Rudolf Bernet, Iso Kern, Eduard Marbach, *Edmund Husserl, Darstellung seines Denkens*, Felix Meiner, Hamburg, 1989, S.102f.

1.4 Brough の見解

また、Husserliana, Bd.X 全体の英訳を刊行した John Barnett Brough が英訳に付けた詳しい解説によれば、まず 1901 年から 1908 年までのフッサールの見解では、知覚はその内部構造として三重性を持つという。つまり、知覚とは単に現在という点的な瞬間になされる意識作用ではなく、対象の過去側面に対し志向的に「眼差しを向けている」し、現在側面に対しても同様に眼差しが向けられ、そして、未来側面に対しても眼差しが向けられている。ということは、知覚といえども、三重構造を有する志向性であるということになる。そして、われわれがすでにフッサールの認識論上の基本概念、ないしは図式と呼んだものの内で IX に当たる考えを「時間意識の構成の図式的解釈」と呼び、特記している。彼の表現だと次のようになる。

何らかの現出の様態での対象は、「もろもろの統握」、ないしは「作用 - 性質」によって、意識に内在する内容を「活性化」することで打ち立てられる¹⁹。

ここでいう「内在的内容」とは、統握の働きと分離した形で考察すれば、特定の対象への指示に関して、ニュートラルである。例えば、ピンクの色の感覚内容自体は、それがデパートに置かれているマネキンの頬の色であるか否かに関しては、なにも語らないのであって、対象への指示関係を限定するのは統握の働きであるというのである。そしてこの図式を時間意識に当てはめる。そうすると、内在的感觉内容は、時間規定に関する限り、ニュートラルであるとみなされる。音の感覚内容自体、今でも、過去でも、未来でもなくなる。そのような時間規定は、時間を構成する統握によることになる。そうすると、知覚作用のどの位相においても、一連の内在的内容が見いだされることになる。そして、そのどの位相においても、そのような感覚内容を適切な仕方では活性化している<時間 - 構成的>統握が見いだされることになる。1905 年の草稿による第 16 節ではつぎのように書かれている。

ある時間客観そのものを与えると主張するような作用 [あるメロディーやあるいは一つの長さを有する音などを知覚する志向作用——持続の長さは相対化されている] は、自らのうちに、<今の統握 (pl.) > や <過去の統握 (pl.) > などを含んでいるはずであり、しかも根源的に構成する統握として含んでいるはずである²⁰。

Brough の説明では、A と B という一連の音の場合、二番目の音 B が知覚される場合、その知覚位相は、時間構成作用である「今の統握」(Husserliana, Bd.X, S.230) によって活性化されている内容、ないしは「感覚」を含むことになる。そのような統握によって、B に関する今 - 知覚が構成される。その時、ちょうど過ぎ去ったばかりの最初の音 A を対象とする第一次記憶は、時間構成作用である「過去の統握」(Husserliana, Bd.X, S.232) によって、内

¹⁹ John Barnett Brough, Translator's Introduction, in: *Edmund Husserl Collected Works, On the Phenomenology of the Consciousness of Internal Time (1893-1917)*, Kluwer Academic Publishers, Dordrecht, 1991, p.XLIII.

²⁰ Husserliana, Bd.X, S.39.

容 A が活性化されることを通じて構成されることになる。そして、最後には、これから起こることに関する第一次予期が、「未来の統握」によって、構成される。今 - 知覚、第一次記憶、第一次予期という、それぞれの知覚位相に属する三重の志向性がこのようにして構成されるという。そうすると、一定の時間的延長を有する時間的対象の知覚の場合、(1) 感覚内容 (pl.) から成る連続体と (2) 時間構成的統握 (pl.) から成る連続体、そして (3) 時間的対象がどのような種類の対象であるかを規定する、対象そのものを構成する非時間的統握がある。

このような説明図式は、あるメロディーやあるいは一つの長さを有する音などを知覚する志向作用を説明するために考え出されたものであるが、そういった知覚作用自体、ひとつの時間客観であり、時間的延長を有することを 1905 年の草稿ですでにフッサールは書いていた。しかし、フッサールは 1909 年「絶対的意識」なる概念を導入してそれを説明しようとするまで、そのような性質を等閑視していたという。

実は、大変難しい問題が生ずる。ある時間客観の知覚自体が、時間客観であり、それが今 - 知覚として時間的特性を有する限り、あるいは少なくとも<現在>という意識を伴う限り、何らかの「時間構成作用」が必要となるのだろうか、という問題である。言いかえると、知覚自体を対象とする、謂わば「反省的」知覚作用は上述の図式に対応した構造を有しているのだろうか。あるいは、内在的な時間客観としての感覚内容自体も認識できるとして、そのような認識作用はどのようなものなのか。それは、現在時に生ずる時間客観に対する志向作用なのであるから、知覚でなければならない。とすると、やはり無限遡行に陥る。それを避けるために、そういった知覚作用などを対象とする、何らかの「気づき」の働きを考える。そのような気づきは、もうそれ以上背後へは遡行できないような「深い」レベルの次元であり、「絶対的」次元であるという。

Bernet の推定では 1909 年に書かれた短い草稿である *Husserliana*, Bd.X の Nr.48²¹では、時間意識の図式<活性化する統握 - 意識内に存在する感覚内容>が維持できないことを示唆している。

Husserliana, Bd.X における最終的な<時間意識の理論>とは、どういうものであるのか。まず意識作用自体について何らかの仕方で気づく、謂わば反省的次元を「絶対的流れ」とし、意識作用以外を志向的对象とする、通常の知覚作用は、そのような「絶対的流れ」が時間的に構成する内在的時間客観として位置づけられることになる。また、先に述べた三重の志向性は、その枠組み自体は保持されながらも、それは今述べた「絶対的流れのアクチュアルな位相」のどれも、今 - 知覚、第一次記憶、第一次予期といった三重の志向性を有するという。

そもそもそれ自体が内在的時間客観である、それぞれの意識作用を反省的作用によって把握するといっても、その際に<統握 - 統握内容>という図式はあてはまらない。というのも、「絶対的意識のレベルには、[対象の繋がるような] 内容がない」からである。過去把持と

²¹ Bernet は *Husserliana*, Bd.X を構成している草稿を、その執筆時期と思想的变化を加味して、4つのグループに分けている。そのグループ 4 (1909-1911 年に執筆された) の最初に位置する草稿がこの Nr.48 である。そして、このグループ 4 では、図式<活性化する統握 - 意識内に存在する感覚内容>が過去把持に対して適用できるかどうかを論じている。Vgl. Rudolf Bernet, *Einleitung*, in: Edmund Husserl, *Zur Phänomenologie des inneren Zeitbewußtseins*, Felix Meiner Verlag, Hamburg, 2013, S.XLVIIIff.

いう意識作用は、これもまたひとつの内在的時間客観であるが、それは、絶対的流れのアクチュアルな位相において何らかの形で現前している [感覚] 内容を記憶的統握によって活性化することで構成されるといったものではない。というのも、そもそもそのような「内容」がないのであるから。そして、フッサールは、最後の番号が振られた草稿 Nr.54 で次のように述べている。まずフッサールは、「先現象的、先内在的時間性は、時間構成的意識の形式として、志向的に自らを構成している」と、述べた後で、時間構成的意識はそればかりではなく、〈絶対的流れの自己現出〉の可能性を語っている。

内在的時間を構成する意識の流れは次のようになっている。「その流れの中で、必然的に、流れの自己現出 (eine Selbsterscheinung des Flusses) が存立しており、従って、その流れ自体必然的に流れることの中で (im Fließen) 把握可能であるはずである。この流れの自己現出と言っても、第二番目の流れを必要とするわけではない。流れは、現象 (Phänomen) として自らを構成している。構成するものと構成されるものとは、合致するが、当然のことながら、どんな観点からでも互いに合致するわけではない²²。」

1.5 Gerlach の批判

しかし、Stefan Gerlach が、論文 *Ist das Bewusstsein mit sich und seinen Gegenständen zugleich?*, *Zu Husserls Modifikation der Zeittheorie um 1909* にて、Bernet や Brough の主張に見られるようにフッサールは、何らかの立場の変更を行ったという見解を次のように批判した²³。

(1909 年以降見られる) 〈絶対的〉時間流についてのフッサールの新しいテーゼは、[それまでの] 意識の時間性に関するテーゼを撤回させるものでもなければ、意識と意識内部において現前する時間的客観との同時性というテーゼを撤回するものでもない。ただ表現を変えたにすぎない。Nr.50 のテキストの中には、その件に関する議論は見いだされず、別の種類のいくつかの問題が見いだされるのみである。[中略] それらの問題というのは、フッサールを、絶対的意識流の導入によって、主観的意識時間に関する彼のテーゼを変容させ、すべての時間関係の新たな基礎付けをするように向かわせた問題である²⁴。

つまり、意識と時間客観との同時性か非同時性かという単純な選択ではなく、別次元への展開がなされたという。

まず同時性に関しては、過去把持における意識作用と対象に関して言えば、「単純で完全な同時性」のテーゼは考えられず、そのような主張をしてもこの『時間講義』全体の基本的考えを破壊してしまうものだ²⁵。

また、知覚に関しては、Edith Stein が付けた *Beilage V* のタイトル「知覚と知覚されたもの

²² Husserliana, Bd.X, S.381f.

²³ Stefan Gerlach, *Ist das Bewusstsein mit sich und seinen Gegenständen zugleich?*, *Zu Husserls Modifikation der Zeittheorie um 1909*, in: *Zeitschrift für philosophische Forschung*, Band 67 (2013), 3, S.396ff.

²⁴ Ebd., S.398.

²⁵ Ebd., S.404.

との同時性」は「非同時性」とした方がよいという。そのような同時性のテーゼは、一般的な形ではフッサールにおいて主張されてはいないとする。

そして、「絶対的時間流」に関しては、1909年から1911年にかけて書かれたと Bernet によって推定された Nr.50 の草稿ではじめて、意識の非時間性が発見されたとするのも、誤解であるという。「絶対的流れは、時間の中にはないけれど、時間の流れとの関係は持っている」という。フッサールのいう「絶対的流れ」は内在的体験流の「形式」(Form)であり、流れの比喩を使って言うならば、<具体的な感覚与件から成る実際の感覚流の流れが、その上を流れ去って行く「河床」(Flussbett) >²⁶であるという。とは言え、「河床」はその上を流れる水がなくなったら、その存在意味がなくなるのと同様に、「絶対的流れ」は形式として、内容とは独立に存立し得ない。そして、その具体的流れの独自のあり方は、<過去把持 - 原印象 - 未来把持>という三相性の内部構造を持つ「水平方向の志向性」(die Längsintentionalität)²⁷で十分表現されているのであり、そのような構造契機が持続や変化、連続性といった主観的現象を可能にする条件となっている。そして、その形式的構造自体としての「絶対的流れ」は、フッサールの表現で言えば、「自己現出」という事態で十分だとする。そして、最終的に Gerlach は次のように結論づける。

フッサールが、一方では、[感覚的]クオリアを有することとそれを意識することとの同時性をもって言い表そうとしたことと、時間的に流れ去るものと対比して絶対的意識流の非時間性ということで言い表そうとしたこととは、同じ事柄の異なった側面に過ぎない。フッサールが、絶対的意識流という概念を用語として導入したことで、時間講義の中ですでに [絶対的時間流という用語を導入するまでの時期の講義、ないしは草稿] 本質的に形作られた形態で呈示された、時間意識に関する自分の根本的見解を見直したのは、名称上のことであって、事柄に関して見直したわけでもなく、ましてや唯一の重要な観点で再検討したわけではない²⁸。

結局われわれは以上の議論から下記の事項を学び取ることができるだろう。

まず、同時性と非同時性は、知覚作用自体の内部構造が三重化し、三相化しているのだから、感覚、ないしは原印象に着目するか、それとも統握による活性化に着目するかで、

²⁶ Ebd., S.423.

²⁷ Längsintentionalität に関しては、Brough の英訳 a horizontal intentionality に従って「水平方向の志向性」と訳す。「流れに沿って長い方向に走る」ことを示唆しているという。lengthwise を単純に「縦方向」と訳すわけにはいかない。縦 - 横は相対的なものであるから、90度転回したら、逆になる。ネット上では、bigfoot の足跡の分析に際して次のような記述が見つかった。Area "C" is located on the right side of the left foot. Notice that the ridges run lengthwise along the side of the foot. This longitudinal flow of the ridges is not found in the human or known non-human primate. 左足の右側面にくその側面に沿う形で、隆起している筋がずっと長く走っている>という意味で、それがこの筋の this longitudinal flow という表現で承けている。足の裏の写真とともにこのような記述があるのだが、lengthwise は、なにか基準となる方向があり、それを遮り、直角に交わる方向ではなく、それに平行な方向を指し示す場合に使用されると言うてよい。フッサールの時間のダイアグラムの場合、縦軸と横軸は90度回転することがないため、縦と横とは、それぞれ垂直と水平に対応する。längs-ないしは lengthwise を「縦」という表現で訳すと、誤解を生ずるので「水平方向」という表現を使用することにする。Cf. John Barnett Brough, Translator's note, in: *Edmund Husserl Collected Works, On the Phenomenology of the Consciousness of Internal Time (1893-1917)*, Kluwer Academic Publishers, Dordrecht, 1991, p.85.

²⁸ Stefan Gerlach, a.a.O., S.424.

知覚の成立する時点が違う。感覚という現象自体を捉えるならば、感覚を有するという事と感覚を意識するという事とは、分離できないはずであるから両者は必然的に同時である。

<統握 - 感覚内容>という図式自体は、時間意識の分析に際してその有効性が失われたということはない。そもそも、この時期以降の『イデー I』(1913 年刊行)では、*sinngebender Akt* と *sensuelle Hylé* との二相性として、カント主義的図式の中で、よりいっそう鮮明に維持されていくのである²⁹。

<時間を構成する絶対的意識流>の存在自体、最終的には「自己現出化」によって、意識に対して立ち現れるということは、そのような根源的なレベルを探り当てたという大いなる意義はあるが、理屈としては<現出の現出>の無限反復を回避する方策という意味がある。絶対的意識流とは、それ自身 *unzeitlich* であるというテーゼは、哲学の中での時間論で絶えず語られてきた *the specious present* が *nunc stans* としてそれ自身、時間的流れから免れているという事態である。アウグスティヌスの三重の現在も同様であり、McTaggart のいう A 系列自体、根源的現在時制が *the specious present* において、自己現前化しなければ成立し得ない³⁰。そして、それは流れる具体的な感覚的内容を含んだ流れとともに、一緒に流れてしまえば、それによって流れるということがわかる基準も引き裂かれてしまうこととなり、流れの感覚が生じ得ない。目盛り自体が、過ぎ去ってしまうのであれば、その過ぎ去り自体どのように知るのだろうか。時間的現出を可能にする時間構成的流れが、流れ去るといった場合、何に対して流れ去るのがわからなくなる。しかしながら、それ自身不活性な仕方であつた動きがなければ、移り去るものの痕跡も残らないであろう。Gerlach が奇しくも「河床」といったように、止まりつつあるものなのだろうが、しかしそれはその流れ去りを感じ取るセンサーの働きがなくてはならない。それは絶えず流れ去る現実によって触発されている必要がある。絶えず触発されている、活ける「河床」なのだろう。

われわれはこれまでフッサールの時間意識の分析をたどり、特に<統握 - 感覚内容>という図式がどのように機能していたかをみた。その結果、時間意識が成立する次元の根底には、絶えず触発されている、活ける「河床」といったものが存在する必要があるとされた。そこでハイデガーに戻り、ハイデガーが「知覚」の動的な構造を見事に解き明かしてくれているテキストを分析することとしよう。ここでは感覚と意味付与的統覚の関係が問題となっている。先取りのにいえば、しかもそれがフッサールでいえば「未来把持」(*protention*)の機能に帰せられるような予期的契機が分析されているのである。言い換えれば、われわれにとって存在するものが自らを呈示してくれるようになるメカニズムが描かれている。

2. 虚偽の「思いなし」をめぐるハイデガーの議論

ハイデガーが 1930 年代に行ったプラトンの『テアイテトス』に関する虚偽論 (1931/1932

²⁹ この論点は、本論文の範囲ではないが、次の研究書を参照のこと。G.A. de Almeida, *Sinn und Inhalt in der genetischen Phänomenologie E. Husserls*, *Phaenomenologica* 47, 1974.

³⁰ Cf. J. Ellis McTaggart, *The Unreality of Time*, in: *Mind*, Vol.17, No.68, pp.457-474.

冬学期講義)を検討する。そこで問題となるのは、虚偽の「思いなし」(Meinung, δόξα)の可能性であるが、特にわれわれは、(1) leibhaftig に gegenwärtig-haben することと (2) 先行的な表象へと関わること、つまり Vergegenwärtigung という二重性を有する Gabel モデルに注目することにする。

まず『テアイテトス』のテーマ、エピステーメー (ἐπιστήμη) とはなにかという問いからはじめられる。まずは、知識の本質は知覚 (感覚 αἴσθησις) なのかを問う。

ハイデガーによれば、ギリシア語の ἐπιστήμη とは、<あるものに歩み近づく、ある事柄に携わってそれに熟達している、通暁している> (ich trete einer Sache näher, befasse mich damit, und zwar um ihr gerecht und gewachsen zu sein)³¹ ことをいう。つまり、ハイデガーの用語では verstehen に当たる。sich auf etwas verstehen という形で使用され、「あることに精通している、熟達している」という意味なのである。それに対して、αἴσθησις とは、具体的には「見ること」であり、それは<現前するもの (das Anwesende) それ自身を把握すること>であり、<存在者をその現在 (Gegenwart) において把握すること>である。それは「現在の持つこと」(ein Gegenwärtig-haben) であるという。あるいは、「見ること」とは、<あるものを、その現前性と恒常性に関して意のままにすること> (etwas in seiner Anwesenheit und Beständigkeit zur Verfügung haben) であるという。つまり、ἐπιστήμη とは、すでに事柄を事前に熟知しているという状態をいい、αἴσθησις とはまさにその現前性において所有することを指す。このような二つの知のありようによって、例えば風貌が似ているソクラテスとテアイテトスを取り違え、テアイテトスをソクラテスだと看做す「虚偽の思いなし」(ψευδῆς δόξα) がなされる。その場合、眼前に姿を現している人間を感覚的知覚によってまざまざとありのままに (フッサールの用語では、leibhaftig) 把握していることと、以前すでに見知っていて記憶の中にとどめておいた人間の像が必要になってくる。つまり、知覚においてすでにこの二層構造がなければ、虚偽の知覚の可能性を明らかににはできない。知覚といえども、単に現在において現出している要素のみならず、何らかの「過剰」な要素の参与がなければ ψευδῆς δόξα の成立はあり得ない。そこで、ハイデガーは、実際には講義室からは見ることができない山の山頂に立つ Feldbergturm を例に出して説明する。すなわち、まず実際に leibhaftig にその塔を見る場合。つまり、視覚的知覚によって<われわれが直接的に現前する存在者をわれわれの現在において所有すること> (wir haben das unmittelbar anwesende Seiende in unserer Gegenwart)、つまり Gegenwärtig-haben、ないしは端的に Gegenwärtigen (現在化) というわれわれの<かかわり> (Verhalten)³²がまずひとつ。さらにハイデガーは、それとは違ったかかわりを指摘する。すなわち、講義室で Feldbergturm を思い出したり、想像したりする場合である。つまり、その存在者が直接にはわれわれの「現在」には現前していない場合に、その存在者を思い出すとか、想像するといったことを行う、いわば<その存在者を現在化するかかわり>、端的に言って Vergegenwärtigen (フッサールの用語の訳語に合わせる形で訳すと「現前化」である) というかかわり方をする。これは当然のことながらわれわれが掲げたフッサールの認識論の基本概念 III の定義に一致するが、しかしハイデガーは、

³¹ Martin Heidegger, *Gesamtausgabe*, Bd.34, S.153.

³² Ebd., S.296.

これまたわれわれが確認しておいた基本概念 II、つまりわれわれの認識作用といえどもつねにそれは何らかの対象へのかかわりであり、なんらかの存在者へのかかわりであることを根拠に、想像したり、思い出したりするという「現前化」でも、単に「意識の作用」ではなくあくまでも、〈ある存在者に対するわれわれのかかわり〉として記述しようとする。

以上の「現在化」と「現前化」という二つのかかわりを区別することで、やっとな虚偽の思いなしの可能性が説明できるのである。

ハイデガーは、虚偽でありうる思いなしの例を具体的に説明している。

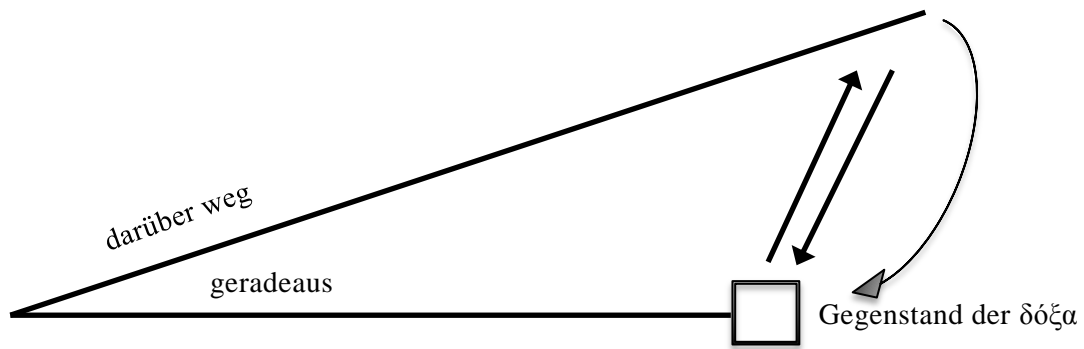
ある人に遠くから出会う場合。そのように見かけられたそのものは、ある見かけを有しており、そのように見える。しかも、それはテアイトスのように見える。したがって、このテアイトスのように見かけられたものをわれわれはテアイトスと看做す。それは、それをちょっと眺め、それが呈する外見から判断して、そう看做すのである。それとは別の可能性もある。われわれはテアイトスを知っている。われわれは彼がこの時間にこの道をいつも来るのを予め知っている。つまり、われわれは予めテアイトスのことをこの、そこにあるように存在している人として現前化する (vergegenwärtigen、想像する、ないしは思い起こす) のである。そして、さしあたっては *leibhaft* に与えられていないこの存在者とその様子に対して、かかわるのである。[略：彼がいま近づいてきている人であるかどうか、十分にはわからないけれども、しかし、そうであるには違いないとわれわれには見えるのである。] われわれは、近づきつつある人をテアイトスと看做すのだが、今のところ、眺めて (つまり、現在化によって) そう看做すのではなく、先行的に現前化すること (die vorlaufende Vergegenwärtigung) によってそう看做すのである³³。

つまり、「思いなし」(δόξα) の場合、Vergegenwärtigung は「先行的」、あるいは「予め」という働き方をする。すでに過去において知っていることを現在において先駆け的に、実際の Gegenwärtigung を追い越す形で、そのものにかかわる。過去からの想起 (μνημονεύειν) なのだが、先駆的予測という面を有している。そして、最後にそのような先行的想起と知覚 (αἴσθησις) とを比較考量する διάνοια がかかわるといふ。そして、結局 δόξα とは、〈直接的現在化において出会うものを、予め現前化した事柄と一緒に結びつけること〉(ein Zusammengreifen des in der unmittelbaren Gegenwärtigung begegnenden mit dem im voraus Vergegenwärtigten)³⁴ というのである。δόξα という事態は、現在化と現前化という二つの志向性を διάνοια によって結びつけることに特徴があり、しかも現前化とは、現在化を追い越し、それに先行するという特徴を持つ。それを図示すれば下記のように Gabel、「二股状の刺叉」の様な形になり、ドクサの対象を挟み撃ちに行っている³⁵。

³³ Ebd., S.311f.

³⁴ Ebd., S.311. プラトンの表現で言えば、次のようになる: ἡ σύναψις αἰσθήσεως πρὸς διάνοιαν. 195d.

³⁵ Martin Heidegger, *Gesamtausgabe*, Bd.34, S.313.



この Gabel の長い歯 (Zinke) は、Vergegenwärtigung を表し、水平のものは Gegenwärtig-haben を表している。そして、両方の志向性を比較考量しているのが $\delta\iota\alpha\nu\omicron\iota\alpha$ である。

ここで、ハイデガー自身、このような構造が心理作用を表現しているものと誤解しないようにと述べていることを承知の上で、敢えてフッサールの認識論、ないしは時間意識の分析と対比してみよう。

「虚偽の思いなし」というのは、認識上の錯誤のことであるが、ハイデガーがプラトンの分析を通して示しているのは、現在化と現前化という二種類の対象関係があり、その異種の志向的对象関係によって、われわれの通常の対象把握は成り立っているということが第一点。そして、さらには、その場合、現前化というのは、フッサールでもそうであったが過去のものでも未来のものでも、あるいは想像上の対象に対しても生じうる関係であるということ。そして、アクチュアルな現在において何ものかを知覚する際にも、知覚とは違った種類の対象関係として、過去の事柄を想起し、そして現在の時点で対象把捉されている知覚像に対して、別のイメージを呈示する現前化の働きが関与する。過去の想起が、知覚に対して先取的になされるのであるから、もうそれは予期ということになる。過去の意味での「先」と未来にかかわる「先」とを両方とも含む作用として考えられている。

基本的には、現在化といい、現前化といい、両方とも何らかの存在者に対するくかかわり > (Verhalten) なのであるから、フッサールでいえば、完全なる「志向性」である。とくに現在化ということで、 $\alpha\iota\sigma\theta\eta\sigma\iota\varsigma$ が考えられているが、ここでは単なる sensation ではなく、perception であった。対象性、ないしは対象関係 (基本概念 II) が成立しているとされた。また、先取的想起としての現前化は、第一次的予期としての protention ではなく、しっかりとした対象関係であるから統握が働いており、expectation である。「思いなしの虚偽」というのは、従って、perception に expectation が介在し、実際とは違った知覚像が成立してしまうというのである。

プラトンによれば、「虚偽の思いなし」ということは、例えばテアイテトスをソクラテスに「取り違えて」思い違いをしてしまうような $\alpha\lambda\lambda\omicron\delta\omicron\xi\alpha$ (mistaking one thing for another) というのではないという。そのような取り違えとは、知覚内部での錯誤ということになるのであり、プラトンはそのような事態を考えていない。というのも、その場合、当人には現に見ている人物が、ソクラテスであるとはまったく考えてもいないからである。ただ、テアイテトスのみが対象となっている。だから、認識者本人にとってみれば、A さんを B さんと取り違えて見てしまっているということ自体、知り得ないのである。B さんを見ているとし

か考えられない。つまり、「虚偽の思いなし」を、「AさんをBさんと取り違えて、思い違いをしてしまう」と定義することは、不可能であるという。

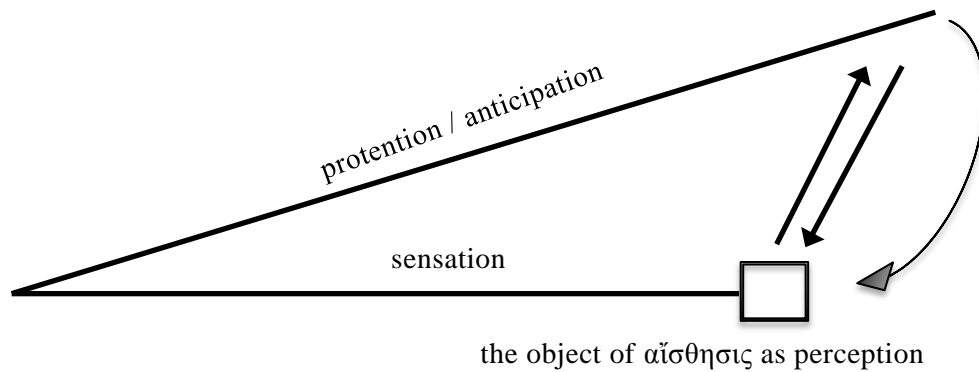
しかし、そうであろうか。

まずハイデガーの解釈によるプラトンの虚偽論では、「現在化」(Gegenwärtigung)と「現前化」(Vergegenwärtigung)を区別する。この区別は、そのような「かかわり」(Verhalten)の対象が現に現前(anwesen)しているか否かで区別している。心理作用の特徴を示して区別するのではなく、そのかかわり(Verhalten)の対象がleibhaftigに現前(anwesen)している場合には、「現在化すること」(Gegenwärtigen)であり、対象が現前(anwesen)しては無く、したがってその対象に間接的にしかかかわらない場合が、「現前化」(Vergegenwärtigung)なのである。対象は、存在しているか、いないかのどちらしかない。例えば、知覚は「現在化作用」(Gegenwärtigen)であり、それは対象が現前していることなのであるから、まざまざと(leibhaftig)現出しているのであるから、見間違うはずはないのである。

しかし、よく考えてみよう。知覚のレベルでなにか見間違うという可能性が排除されるということは、どういうことなのだろうか。ハイデガー自身の説明でも、「さしあたってはleibhaftigに与えられていない」という表現を使っている。知覚における明証性の違いを語っているのである。「与えられる」というのは、意識の様態を記述するタームである。かかわり(Verhalten)に関しては、かかわるか否かしかない。leibhaftigにかかわるという表現は不可能だろう。知覚に明証性を認めるのであれば、極く明証性の低い場合には、AさんをBさんに取り違い、その明証性がだんだんと高まるにつれて、鮮明な知覚像が結ばれ、Aさんその人であることがわかることがある。そのような場合、後になって、「私はAさんをBさんであると取り違えた」と言えるのであり、取り違えていたそのときには、「私はAさんをBさんであると取り違えています」とは、言わない。したがって、われわれには、まだ<AさんをBさんであると取り違える可能性>の解明をする必要があるのである。知覚の様態の解明である。

それでは、フッサールの例を思い出そう。

例えば、phi-lo-so-phyという単語は、-lo-の発音が聞こえた段階でphi-は過去把持によって意識にとどめ置かれているが、同時にその時点ですでにリアルタイムで意味付与がなされ、<philosophy>ではないかという予料(Antizipation)がなされる。そして、次の時点での音声的刺激への未来把持が生ずるはずである。つまり、-so-への予料である。その場合は、予測が破られ、変更がなされ、修正される。これは、「現在化」(Gegenwärtigung)内部の出来事である。そこでハイデガーが「現在化」(Gegenwärtigung)と「現前化」(Vergegenwärtigung)との関わりあいに関して描いたGabelの図を、「現在化」という知覚内部の構造に移して、描きなおしたらどうなるのだろうか。それが下記の図である。



この図は、本論文で述べたフッサールの認識論の基本概念 IX、つまり「感覚的内容とその内容へ意味付与する「統握作用」との関係」を表している。「意味」を与えるというときの「意味」とは、過去の記憶に源泉があり、その時々々の知覚においてさえ、未来把持 (protention) の作用によって先行的に予料 (anticipation) され、感覚内容へと投げ返されるという構造になっている。上図はそのような構造をよく表現していると言えよう。これは認識作用の極く微細な局面の時間構造なのだが、実はこのような構造こそ、物事がわれわれに対して現れ出るといふことのプロセスの構造なのである。

ハイデガーが『テアイトス』の分析に際して描いた図は、物事に対する「思いなし」というかかわりが「現在化」と「現前化」の連動によって可能となっていることを示していた。特に注目すべきは、「現前化」というかかわりが、対象を先取的に現前化することであった。

対象が時間の流れの中であって、われわれに対して現出してくるといふことは、認識の記述としては「現在化」するということであり、ハイデガーの指摘している「二股状の刺叉」(Gabel) の長い「現前化」の作用は、フッサールのいう予料的な「意味付与」作用に当たると解釈できると思われる。そして、ハイデガーの議論が教えてくれているのは、そのような予料的な意味付与作用は、現在化自体を追い越してしまっているということである。

3. 結語にかえて ——<対象>の自己呈示と「立ち現れ」——

さて、最後にこれまでの議論を念頭に置き、ハイデガーが 1940 年代に行った『ヘラクレイトス』講義に注目し、ζωή 概念について一言、言及したい。

ハイデガーによれば、古代ギリシア人たちにとっては、ζῶα とは、「立ち現れるものであり、その立ち現れにおいて臨在しているもの」(die Aufgehenden und im Aufgang Anwesenden) という意味をもち、「閃き入るものであり、現出するもの」(die Hereinblickenden und Erscheinenden) にもふさわしい名称であるという³⁶。それは端的には「立ち現れること」としての φύσις と根源的な繋がりがあろう。だがそのような「時間的過程としての現出」といふことは、単に「生きるもの」、現代的には生物学的生命を意味するのではなく、いわばあ

³⁶ Martin Heidegger, *Gesamtausgabe*, Bd.55, S.95.

る<時間的な、あるいはダイナミックな形式的構造>を言っている。

しかし、単に形式的と言うことばかりではない。ある種のエネルギーの発現を実感させる経験に対応しているように思われる。

フッサールがその時間論において探り当てた絶対的な時間構成意識とは、本質的には、目の前の生々流転するヘラクレイトスの流れに対峙し、その生成に立ち会っているわれわれ自らの生の、つまり ζῆν (生きること) を指しているように思われる。つまり、流れ去りの動きを感じ取りつつある、生きた「河床」として、言い換えれば、物事の現出が可能になる「生きた場」(生命そのものとしての場所)こそが、そのような絶対的時間構成意識だと思われる。

ハイデガーが「対象の対象性」の根底に垣間見た φύσις と ζωή とは、われわれの日常生活世界の具体相の根底にあり、端的にまさにそこに出現しつつある、そのような生命的現実を指しているのではなかろうか。そして、そのような現実とは、われわれにとってやはり確実なクオリアを伴い、感性の次元で立ち現れてくるものである。

フッサールにおいても、ハイデガーにおいても、根本的洞察は同じである。生は自ら生起する時間そのものである。<対象>存在は、自然としての立ち現れであり、そして同時にわれわれ自身の存在も、生としての立ち現れである。両者の立ち現れの呼応こそがこの世界の現出ということなのだろう。

シェーラーは、そのような呼応関係を<問いかけに対する、対象自身の応答反作用>と概念化し、対象の「自己呈示」、ないしは「自己開示」と呼ぶ。そして、世界全体としてみると、世界が自己開示する出来事として、書物による「啓示」に匹敵する「自然的啓示」(natürliche Offenbarung) であるという³⁷。

ハイデガーのいう「現在化」と「現前化」を通じてあらわとなる存在者もそれは、全体としての自然の自己開示の一齣なのであり、そのような自然の側からの自己開示は、シェーラーの言うようにそれはそれで「自己啓示」である。そして、そのような自己啓示に立ち会う人間の生の側には、流れ去りつつある世界の時間的現出を、時間性の届かぬ次元で待ち受けている「生ける場所」がある。

たとえ無機的な自然現象の一齣であっても、それが出現している、あるいは出現するというその現場では、それはわれわれ生き物にとっては、生き生きとしたクオリアを伴った経験

³⁷ 「知的作用における形象 (Bild) あるいは意味 (Bedeutung) の現出 (Erscheinen)、たとえば単純な知覚におけるそれらの現出がすでにそうであり、愛や関心の増大に応じての対象の所与性の充実化も同様であるが、それが彼 [アウグスティヌス] にとっては、単に出来合いの対象のうちに認識主観の活動が侵入するというのではなく、同時に<対象自身の応答反作用> (eine Antwoortsreaktion des Gegenstandes selbst)、すなわち対象の「自己呈示」(Sichgeben)、「自己開示」(Sicherschließen)、「開明」(Aufschließen)、言い換えれば対象の真の自己啓示 (Sichoffenbaren) でもある。それはいわば愛の「問いかけ」(Fragen) なのであって、これに対して世界は、みずからを「開示」することで、そしてそうすること自体においてはじめてみずからの完全な現存在 (Dasein) と価値とに到達することで、「応答する」(antworten) ののである。かくしてアウグスティヌスにとっては、世界の「自然的」認識の成立さえもその対象的な条件から考察するなら「啓示の性格」をおびてくるのであり、そして「自然的啓示」(natürliche Offenbarung) の概念がキリストにおける積極的な宗教的な啓示の概念と相並ぶことになる」(Max Scheler, *Liebe und Erkenntnis*(1915), in: *Gesammelte Werke*, Bd.6, Francke Verlag, Bern und München, 1963, S.97)。

そのものなのであり、命の次元での触れ合いであり、シェーラーの表現では「呼応」である。そのような触れ合いは、必然的に二面性を有するが、しかしやはりそれは同次元の触れ合いとして一元的である。

「生の哲学」を構築しようとしたディルタイは、そのような「生の一元論」に立って、「宇宙の一切の現象」の〈二側面〉について次のように語っている。

宇宙の一切の現象 (Erscheinungen) は二つの側面を持っている。一方の側面から見ると、すなわち外的知覚においては、宇宙のあらゆる現象は、感性的対象として与えられており、しかもこのような感性的対象として自然的 (physisch) 連結に内に存立している。これに対して、いわば内部から把握すると、これらの現象は自らの内に、われわれ自身の内部において体験されうるような生の連関 (Lebenszusammenhang) を有している³⁸。

ディルタイのこの言葉を持って本論文を終えることとする。

Isamu MIYAHARA

Über Zeit und Leben

— *Die Treffpunkte zwischen Heidegger und Husserl*

³⁸ Wilhelm Dilthey, Die Typen der Weltanschauung und ihre Ausbildung in den metaphysischen Systemen (1911), in: *Gesammelte Schriften*, Bd.VIII, S.117.